



総科で輝いている人紹介



今回語ってくれた方々

スポーツ科学プログラム専攻

加藤 慧太さん

地域文化プログラム専攻

福岡 奈織さん





総科で輝いている人紹介!

加藤 慧太さん

スポーツ科学プログラム専攻

— 学生生活で頑張ったことは? —

東広島市の国際交流フットサルリーグの運営委員長をやっていました。広島には、たくさんの方の外国人労働者や留学生がいるにもかかわらず、昔、広島県で外国人による犯罪があつたことによつて、県内での外国人へのイメージがあまり良くなかつたんです。この活動は、国際交流の促進と多文化共生社会の実現という理念のもとで、外国人と広島の人々の関係を改善するために開催されています。僕は、その三代目の委員長を務めました。参加者はマツダの研修生、広大の留学生、社会人、その子供さんなど、大人から子供まで様々な人が集まります。

フットサルはボール一個あればできるし、世界共通のスポーツだから、言葉が分からなくても簡単に交流ができるんです。でも、やっぱり外国人と、社会人と、大学生つて、住んでいる世界がちよつとずつ違います。その人たちが一緒に活動できる場所を作り出せば、そこから輪が自然と広がっていくから、最初のきっかけづくりを大事にしていますね。

— 大変だったことはありますか? —

この活動には広島県、東広島市、商工会議所の方々も関わっていて、学生という立場から自分よりも経験豊富な社会人相手に会場を用意したり、リーグの運営に関する指示をしなければいけなかつたのは大変でした。ただでさえ社会人と接することがあまりない大学生活の中で、社会の重役の方々とお話を進めるのは、一大学生にとってなかなか苦労しましたね。

— そのような苦労はどんなふう乗り越えたのですか? —

相手の要求をしっかりと理解して、その要求をできるだけかなえつつ、ここは譲れないところをはちゃんと主張する。でもやっぱり自分の方が経験も少ないので、まずは結果を出すことで認められようと頑張りました。結果が出ればこちらの意見もだんだん通りやすくなるんですよ。



—具体的に、どのような結果を出すことができ
ましたか？

例えば社会人、学生、外国人、子供、男性、女性、といろんな人たちがいて、それぞれ固まって話している状況下で、どうやったら交流してもらえるか、というのを考えた時に、チーム分けを工夫しました。仲良しでチームを組んでも交流は広がらないので、大きな円になって、通し番号でチーム分けすることで、いろんな人が集まったチームができるんですよ。もちろんチーム内で言葉は通じません。そういう状況で、その人たちに仲良くなってもらうためにゴールを決めたらハイタッチをするというルールを決めました。怒ってハイタッチする人っていませんよね？必然的に笑顔になって、何を言っているかわからないけど、いい気持ちになって、交流ができるでしょ。試合中にそういうルールがあれば、試合が終わっても単語やジェスチャーでコミュニケーションが取れる。そういう場面が会場内ではほらみえてきたんですよ。そうしたらある程度自分が認めてもらえるようになりました。交流のきっかけを僕が提

供できれば、あとは自然に交流が広がっていく。そのサポートがうまくできたことがよかったなと思っています。

—この活動で得たものは何ですか？

大人と話す機会が多かったのはすごくいい経験でした。広島大学って、立地的にどうしても少し閉鎖的になってしましますよね。その中で幅広い職種の大人と話す機会があったことは自分にとつていい機会でした。学生以外の人も知ってみたいと思う時が来た時に、機会がないと大人、社会人の意見ってなかなか聞けません。その点、何か困ったことがあった時に、相談できる社会人がいたことや、社会人と接する中で基本的なマナーが身についたことは良かったなと思います。

—せっかくなのでフットサルリーグ以外の活動のお話もききたいです！

体育の日に総科の運動会をやりました。総科の一年生から四年生までの、学年を超えたつながりって薄いでしょ？総科っているんなことが学べて、就職も多岐にわたっている。

こんな多種多様な進路が先輩たちによって開拓されているんだから、先輩からいろんな話が聴けたら在學生にとつていいなと思って、在學生も卒業生も含めた総科生の縦のつながりを作るために開催しました。今年が初めての試みだったから、今年は卒業生は来なかったけど、来年もこの運動会が開催されたら、自分たちの代で何人か戻ってくるかもしれない。そうやって就職した先輩が戻ってきて、先輩と後輩が仲良くなれて、学部としていつながりが増えてほしいと思っています。

今回組を三つにわけて、赤組、青組、たまご組(笑)があつただけど、実際にそれぞれ終わった後に何回か交流会があつて、縦のつながりを作ることができました。そういう場って今までなかったんですよ。例えば在學生が何か活動したいと思った時に、同じような活動をしていた先輩が過去にいて、その人とながることができれば、アドバイスがもらえるかもしれないでしょ？また、いままで僕がたくさんの先輩にお世話になってきたから、先輩にさせていただいたことを後輩に返す、



「恩送り」がしたいという気持ちもありました。後は単に大学生活の最後に楽しいことがあったから開催したっていうのもあります！（笑）

運営も二、三、四年生でやっていて、四年生で運営のノウハウが分かっている人が後輩に教えることができれば、僕たちが四年間で学んだことを後輩が早いうちに身につけて、さらなるスキルアップが大学生のうちにできればいいなと思いました。

―後輩を育てる意味もあつたんですね。

そうですね。この運動会の参加費は500円でした。でもお弁当とか、スポーツドリンクとか、石灰とかの物品を用意するためには、結構お金がかかってしまいます。そういう時に酒まつりで僕が知り合ったお弁当屋さんなどをお願いして、安く仕入れることができたんですよ。こういうことって、4年間でいろんな関係を築いてきた4年生だからできることでしょうか？そういうつながりを後輩も作って、いろんなことに挑戦していつてほしいです。

―今までのお話を聞いていて、加藤さんは人とのつながりを大切にしているんだと感じましたが、つながりを作るのに大したこととは何ですか？

仲良くなるにはみんななんらかのきっかけがあるんです。一回話した人と、次にすれ違った時に「あ、こんにちわ！」ってなると、「すっ」って通りすぎちゃうだけの人では今後の関係の発展の仕方が全然違う。一回会った人との二回目を大事にすることがつながりを作る上で大切なことですね。一回だけ会う人って人生でなんぼでもいるからすぐに忘れてしまう。勉強の復習と一緒に翌日にもう一回声をかけたら、より記憶に残りやすくなって、その後の関係まで発展すると思っています。だから僕は出会った人、魅力を感じた人にはその日のうち、遅くとも翌日には一度ご挨拶の連絡を入れることを心がけています。二日続けて会いに行くのは難しくてもメール一通、電話一本送ることなら誰にでもできるはずですよ。

―総科生に一言お願いします！

人とのつながりを大事にすることで道が開けてきます。自分が正しいと思ったことをやってみてください。いろんな人の話を聞く機会はいろいろあると思います。その時に大切なのは、話を聞いたことを一つの意見として捉えることです。その人の人生で成功だったことは自分の人生では失敗かもしれない。他人の意見を鵜呑みにせず、いいなと思うことだけを取り入れて楽しんで学生生活を送ってください！

それから、卒業後は北海道で仕事をしています。帰省する道産子のみなさん、北海道観光をしたいみなさん、ぜひご一報下さい！美味しいジンギスカン、海鮮、スイーツを用意してお待ちしております。総科生には特別のお・も・て・な・し、しますよ！

【担当】 25生 小林 美月

25生 星原 有里



福岡 奈織さん

地域文化プログラム専攻

—現在、大学生生活の中で一番力を入れて頑張っていることは何ですか？

STUDY FOR TWO という学生社会企業団体の活動です。STUDY FOR TWO の活動は、学生から教科書を回収し、それを新学期など、みんなが教科書が欲しい時期をメインに中古の教科書として半額で販売をし、その収益を途上国の子供たちの教育支援金に当てるというものです。

全国に六十大学ぐらい活動しているところがあります。私はその一つとして一年生の終わりから二年生の初めにかけて広島大学支部を立ち上げて活動を始めました。高校の頃から国際貢献などの分野には興味を持っていて、大学に入ってその分野で何かやりたいと思っていました。二年生になって、他大より閉鎖的で、学生数が多い広島大学の特徴を生かしてできることを模索していた時に STUDY FOR TWO を見つけました。

STUDY FOR TWO の活動は、他の大学に飛び出していかなくても大学内の学生を巻き込むことができ、広島大学の学生にとって視野の広がるきっかけを作る団体にもなれ

ると思っただんです。

三年生の十月ぐらいから全国の支部を統括する副代表になって、副代表として全国の学生の活動をサポートしたり、関西や関東に比べて学生が外に出て活動する枠の狭い中国、九州の大学にアプローチして、支部を作ったりしていました。

—何もないところから一つの団体を作るのはすごく勇気のいることだと思うのですが、大変なことはありませんか？

STUDY FOR TWO が広島にできて、教科書のサイクルが生まれるということとはすごく楽しみだったので勇気がいるとはそんなに思わなかったです。それに学生生活の中で自分で新しいものを生み出して、それが先輩たちの手によって継続されていくというのは自信になるし、一緒に STUDY FOR TWO を作ったたくさんのメンバーと切磋琢磨できた思い出が残ったりするので、一つの団体をゼロから作ることができて幸せだったなと思います。

—どのような活動をされていますか？

STUDY FOR TWO という団体や、広島の原爆関係の活動を行っています。



—これからの展望はありますか？

広島大学の支部においてはまだまだ物足りない部分、成長しないといけない部分がたくさんあると思っています。活動自体を主体的に引っ張っていくのはもう私ではなく後輩たちなので、卒業するまでにいかに広島大学の学生に身近で、もっと支援しよう、と思ってもらえる団体にしていけるかというところが課題だと思っています。

—将来の夢は？

私は人が好きなので、人と人とのつながりをコーディネートしていく立場にいたいと思っています。自分の経験や知識を元に、人のムーブメントをサポートできるような人材ではありたいですね。

そういう人になりたいと思って、今年の四月から半年間休学して、被爆者の方たちとチームを組んで、世界各国の港町でヒロシマ・ナガサキの被爆の話や核兵器の現状を伝えていくピースボートという船に乗って世界一周してきます。被爆や戦争体験の継承は、若い人たちを巻き込んでいかないと進んでい

かないけれど、若い人たちの、継承していくという動きがまだ不十分なように感じています。人と人とをうまく繋いでいくという意味で私にどういことが出来るのかを勉強したいと思っています。

—そういう大きなプロジェクトの話が舞い込んでくるためのコネクションを作るために心がけていることはありますか？

基本的に運がいいんですよ(笑)人の運に恵まれていて、偶然が偶然を呼んでうまくいくみたいなことが多いですね。ただ、「自分はこう思う」とか、「自分はこんな立場で行動していきたい」とか、「こういうことに関心があつてこういうプロジェクトに関わっていきたい」などという、ある程度のビジョンを自分自身の言葉にできるということはとても大切だと思っています。新しく出会った人、交流会や講演会で出会う人に自分のことを話せるかどうかは重要なんじゃないかな。

あとは興味があることには足を突っ込んでみることに思っていること自体にも価値

はあると思うけど、自分や社会を動かしていくにはやっぱり思っているだけじゃダメです。一人じゃ何もできないから人とのつながりが重要で、その分野に長けている人や興味がある人と会って話す機会を自分で作って、そこからどう動いていくかが大切ですね。

—これからどんな人間になっていきたいですか？

今欲しいと思っているのは表現する力と発信する力です。自分が思っていることがあっても人にきちんとその旨を伝えることが十分にできないと、やりたいことがやりたいようにできないかもしれないですね。最近、「もつと多くの人を動かしたかもしれない」とか、「もつと中身の詰まったものが達成できたかもしれない」という悔しい思いをする場面がよくあつて、自分の考えや他の人の考え、根本的な事実や背景など、自分が媒体となって伝えるものをいかにインパクトのある形で正確に相手に伝えられるか、という力が必要だと思っています。そのためには自分の知識を増やすことや身振り手振りをうま



く使うことも大事だと思し、相手を見る力も必要です。

—いろいろな活動をしていらっしやいます
が、たくさんの方に興味や関心を持つには
どうしたらいいですか？

満足し切らないことかなと思います。満足
してしまうと「これくらいでいいかな」とそ
れ以上何もしたくなくなります。今、周りに
あるものの中で満足、完結させてしま
うのではなく、何があつたらもつと良くなる
のか、ということや、満足している自分をち
よつとどけて、本当にやりたいことは何なの
か、我慢していることは何なのかということ
に目を当てたりしています。

また、授業中や活動の中で、新しく出会っ
た人との会話の中でちよつと興味あるなっ
て思う瞬間にメモして調べてみるとか。そん
なところから自分の興味関心が広がって
いる気がします。根本的なことはちよつとよく
わかんないかな。私自身が結構好奇心旺盛だ
から(笑)

私が知っている世界はほんと狭いって

思うんですよ。だって宇宙とか言っている
時代に日本で、広島で、広島大学の中であ
る活動できないとかちよつともったいな
人生損してるなって思つて(笑)いろんなこ
とを頑張っている人が世界にはいるし、そ
ういう人たちがいてこそ今の世界なので、
途上国の問題とか数限りなくある社会問題
とかにフォーカスしていきなと思いま
す。あつ、それかな。興味関心というかこの
思いが根底にあるというか。

—総科生に一言お願いします！

総科で勉強しているからこそ学問的に幅
広いものを得ていると思うので、その知識や
興味を授業の中だけではなくて、自分の生活
の中で行動として体現しておくべきだと思
います。実際に、自分が動いて何かしようと
考えて、行動に移すプロセスでいろんなこと
に気が付くし、その中で興味広がります。
その時出会った人も社会に出て行く上で自
分の貴重な財産になるし。

大学に行って授業を受けてバイトをする
みたいな大学生活ももちろん素敵なことだ

とは思うけど、私なりの大学生活の楽しみ方
はやっぱ自分で学んだことや授業で知っ
たことをアウトプットする場所を自分で見
つけてやってみることですかね。新しい出会
いややりがいも生まれます。就活のためとか
院に進むためとかじゃなくて、自分がちよつ
とでも興味があることを行動に移す機会を
持つていけば、必ずそれは大学を卒業してか
ら自分の糧になります。そういう時間が取
れるのが大学生活の一番の宝物だと思うの
で、四年間後悔しないようにやれることはや
つておいた方がいいと思います。

「ちはやふる」という漫画の中で、「やり
たいことをとことんやるためには、やりたく
ないこともしつかりやってかなきゃいけな
い」というフレーズがあるんですよ、だか
ら授業はしつかり聞いて勉強していかないと
いけないって思っています(笑)

【担当】 25生 小林 美月
25生 星原 有里